



四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1) 真実かどうか
- 2) みんなに公平か
- 3) 好意と友情を深めるか
- 4) みんなのためになるかどうか

第 2037 回例会(平成 26 年 1 月 14 日)

会長挨拶

宮内 博

今月はロータリー理解推進月間です。会員にロータリーについて知識と理解を一層深めてもらい、同時にロータリアン以外の、一般市民にもロータリーのことをよく知ってもらうためのプログラムを実施する月間です。

本日は、ロータリアンが好んで口にする言葉のひとつに「奉仕の理想」についてお話しさせていただきます。よく使うのだが意味がよく解らない言葉と思います。

英語では“Ideal of Service”となっていますが、日本のロータリーの創始者、米山梅吉氏がこれを「奉仕の理想」と翻訳し、そのまま今日に至っています。

“Ideal of Service”（奉仕の理想）は現代語で翻訳すれば、「奉仕理念」ということとなります。ロータリーの目的や重要なロータリーの文献にもこの「奉仕の理想」が頻繁に使用されており、日本では同じ名前のロータリー・ソングとしても馴染みの言葉となっています。しかし、ロータリーの公式文庫にはこれをはっきりと定義した文章はありませんが、これをいかに適用するかを示した唯一のドキュメントが決議23-34です。決議23-34には「ロータリーとは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。

この哲学は超我の奉仕” Service above Self”の哲学であり、最もよく奉仕する者、最も多く報られる“he profits most who serves best”という実践倫理に基づくものである」と具体的な補足説明がなされており、ロータリーの奉仕理念は、ロータリーの二つのモットーに示されたものと思われま

す。国際ロータリーの組織化に貢献した、チェスレー・ペリーは「奉仕の理想（理念）」について、個人的な見解として、「何処においてもロータリー・クラブにおいても、一つの基本となる理念を大切にしている、それは他人を思いやり、そして他人のために尽くすことである」と説明しています。

皆さんにもロータリー理解推進月間にあたり基本中の基本であるが実はあまり判っていない「奉仕の理想」を再確認して頂き、実践していくことをお願いしまして会

長挨拶とさせていただきます。

幹事報告

- 1・ガバナー事務所より
 - ・フィリピン台風災害義援金に関するお伺い
 - ・シドニー国際大会に伴う「千葉ナイト」のご案内
 - ・日本人親善朝食会についてのお願い
 - ・第37回RYLAセミナー開催案内および参加ロータリアン・青少年のご推薦について(ご依頼) 受領
- 2・ロータリー日本財団より
 - ポールハリスフェロー認証品 受領
- 3・例会変更のお知らせ
 - 旭RCより
 - 1/31(金) 点鐘 18:30 「黄鶴」
 - 夜間例会(新年会)の為 受領

卓話

「人は幸福になるために働いている」
—介護の仕事を通して—
銚子ロータリークラブ 佐藤 直子 会員

私は高齢者福祉、高齢者の介護という仕事をしています。デイサービスという在宅の高齢者を支援する仕事に就いて丸10年が経ちましたが、この10年という月日には、実に多くのお年寄りとお会い、そして別れがありました。

その中でも特に、この仕事に就いてすぐのこと、今でも深く心の中に残り、そして、「介護という仕事の本質」を深く考えさせられ、また、「介護の仕事に対する確固たる信念」を持てるようになったことに、大きな影響を及ぼしたとも言える、ある方との、大切な出会いをお話ししたいと思います。

開所して間もないある日のこと、他事業所のケアマネージャー（ケアマネージャーとは、お年寄りや介護サービスを繋ぐ役割を担う人です）から、新規利用の依頼がありました。そこでまず、最初に伝えられたのが、「市内で最も難しいと言われている女性なのですが、大丈夫でしょうか？」という言葉に、正直、一瞬戸惑いましたが、その時はこれから自分が担っていく介護という仕事に、「根拠のない自信」と、「新しい分野に挑戦する意気込み」だけはあり、「こちらが利用者を選ぶのではなく、利用者の選択に資する」と、学んだ「介護の基本」を文字通りにその方を受け入れることにしてしまったのです。

しかし、そこからが、ケアマネの言っていた意味を初



めて実感することになるのです。その方は、「すいさん」と言います。80歳の女性です。認知症ではありません。赤ら顔で背中の丸い、小さな、小さなお婆さんで、部屋にはごみ袋や紙袋が部屋の壁という壁にうず高く積まれた、まるでゴミ屋敷のようなアパートの一室に住んでいました。

実際に利用が始まってからというもの、決まった時間に迎えに行っても毎回支度はしていない。それでも、明るく声を掛け、支度の手伝いをする職員たちは、皮肉交じりの言葉を散々投げ掛けられながらも、どうにかこうにか送迎車に乗り込み、施設に着きます。そして皆が、玄関先で出迎え、介助の手を差し伸べても、勢いよくその手を払い除ける。挨拶をしても、話しかけても、まるで聞こえていないかのように無視します。そして、それは終日続くのです。

「すいさん、おはようございます。」「すいさん、今日の体調は如何ですか?」「すいさん、今日は良いお天気ですね。」「すいさん、少し運動をしてみましょうか?」「すいさん、お風呂に入りますでしょうか?」「すいさん、なにかしたいことはありますか?」「すいさん、なにか気に入らないことがありますか?」「すいさん、また、待っていますよ。」「すいさん、明日もまたいらして下さいね。」

普段お年寄りにそうしているように、いえ、それ以上に気を遣いながら、何度も何度も、何度も何度も声を掛けますが、絶対目を合そうとしないまでか、ふらつく足元に転倒しないようにと手を差し伸べても、その手を振り払う。そして、四六時中、ぶつぶつと呟くように何かを言っている。みんなが楽しむレクリエーションには当然、参加しません。そんな頑なまでに拒絶的な態度。こんな強烈な個性がこのまま永遠に続くのかとさえ思われました。

そうしたある日のこと、とうとう職員から「これでは、デイにいらしている意味があるのでしょうか?」という疑問の声が上がり、勿論口にさえしませんが、徐々に「頑固婆さん」というレッテルを貼られるようになってしまいました。

でも、不思議なのですが、こんなに色んなことを拒否し反抗的な態度を続けるにも関わらず、すいさんは、次の利用日も、その次の利用日も、利用日には、決して休むことなく来るのです。それがどうしてなのか、その時は私にも分かりませんでした。しかしながら、とにかく利用の続く限りは、あの手この手で、この「頑固婆さん」へのアプローチを諦めず積極的に関わっていき、既に心に決めていました。

こうした日々がどのくらい続いたのでしょうか。ある日のこと、お席に座っていたはずの、すいさんの姿が見えません。驚いて周りを見渡してみると、いつもの「頑固婆さん」とはちょっと違った顔をして、デイルームの出

入り口からこちらを見て、私に向かって手招きしているのです。そして、くると後ろを振りむき、デイルームから離れてどんどん遠くに行ってしまう。慌てて後を追いかけていくと、傍にあった椅子に座ると同時に、いきなり…「葬式代だけはあるから、その時はそれを使ってくれ」と、話し始めたのです。こちらは、俄かにはその意味が分からず、戸惑いながらも、その一言、一言に耳を傾けました。こちらも必死です。初めて自分から、その重い口を開いたのですから。「自分は天涯孤独の身である。」「両親は自分が若い頃に亡くなっている。」「看護師をしていた。」「結婚はしたけど、子どもは出来なかった。」「夫は本当に身勝手な人だった。」「その夫に裏切られた。」「同じ墓には入りたくない。」だから…「葬式代を預けたい。」と。

その度に私も、相槌を打ちながら、「そうですか。天涯孤独。」「そうでしたか、ご両親は若い頃に。」「ええ～看護師さんだったんですか」「お子さんは出来なかったのですね。」「ご主人が。」「そうですか。そんなこともあったのですか。」「同じお墓に入りたくないのですね。」と、肯定も否定もせずに、同じ言葉を繰り返し、彼女の言葉と感情を必死に受け止めました。

そして、そんな話が全て終わるころに、今までニコリともしなかった「頑固婆さん」の目が少しずつ穏やかな目つきとなり、口元がわずかに緩み、やがて、優しい顔になっていったのです。

この瞬間、私は、「孤独という深い闇の中」にいた「すいさんという個人」に、初めて触れたような気持ちになり、胸が熱くなりました。そして、自分たちの想いの方を優先させていたことは、「押し付けの介護」ではなかったのか…と、考えさせられたのです。ただただ、自分のことを、自分の過去を、今までしてきた自分の苦勞を、すいさんは誰かに共感して貰いたかったのです。

このことがあってから、私たちは、勿論、「頑固婆さん」というレッテルを剥がし、「すいさんという個人」に「その人生背景を含めたすいさんという人」に注目するようになっていき、すいさんのことを多く共有するようになっていきました。

ゴミ屋敷のような、と言ったその部屋で、目の悪いすいさんは、そのゴミの山を頼りに、両手を広げながら、伝い歩きをして移動していたのです。夜は、背中の丸くなったすいさんは、お布団に横になって寝ることも出来ずに、うず高く積まれたゴミの山の、ほんの少しの隙間に、寄りかかるようにして寝ていたのです。

こんな生活環境を知っただけでも、すいさんが、どれだけの孤独を感じていたのか、人との接点を全く持たずにいたすいさんの気持ちを察することが出来るようになっていったのです。

よく、「年を取ると人は丸くなる」と言われますが、そ

れは嘘です。それどころか、どんどん、どんどん、「個の塊」になっていき、人によっては「自分の殻」に閉じ籠るようになります。これまでのすいさんの言動は、すいさん自身も、なかなかその殻を破れなかったからなのです。それにも関わらず、最初から、「頑固ばあさん」というレッテルを貼ってしまったことを深く恥じました。

そして、そのことは、「すいさん自身」にも、少しずつ変化を齎していったのです。「おはようございます。」と声を掛けると、下を向いたままでも、小さな声で「おはよう。」と返してくれるようになり、介助のための手を差し伸べると、遠慮がちに、その手を介助者に伸ばすようになっていきました。

こうして、私たちが「介護という日常」を通じて、徐々にその信頼関係を築き始めた頃、さらなる「大きな変化」が突然やって来たのです。

その日は、毎月恒例のお誕生会があり、すいさんのお誕生月でした。まだ少しだけ頑固さを残したままのすいさんです。直前までお誕生席に座ることを拒んでいたのです、多分、その席に座ることはないだろうと、私たちは半ば諦めていました。ところが、皆さんがぞろぞろと席に着き始めた頃、突如一人で歩き始め、無表情のまま、ご自分の席に座ったのです。それから、自分の名前が呼ばれると同時に、これまでにないくらい勢いよく立ち上がったのです、そして、予想だにできなかったことを口にしたのです。そこで、私たちは実に感動的な場面に遭遇したのです。

「皆さん、今日は私のために、お誕生会を開いて下さり、ありがとうございます。」「私はここに来て、本当に皆さんにお世話になりっ放しです。」「私は、ここが好きです。」

「私は…（ほんの少し躊躇した様子で）…ここで死にたい！」

…と言ったのです。そのお顔は、少し歪んで見え、目には涙が浮かんでいました。そして、その余りに唐突な言葉と、今まで彼女からは一切聞いたことのない、はっきりとした「感謝」の言葉が、突然、私たちの胸に飛び込んで来て、その言葉の全て終わる前に、そこにいた全ての職員が涙を流していました。感動の涙です。

これこそが、まさに！介護者にとっての「大きな報酬」と言えるものです。予期せず、こういう言葉を聞いたことは、私たちに、この仕事に対する自負と、確信と、新たなモチベーションを与えてくれるものなのだ、実感した瞬間でもありました。

その時の感覚とは、まるで、「長い冬を忍耐強く辛抱して、やがて、春の暖かな日差しの下、根雪が融けるごとく、固くこわばっていた身体と心が、ふっと、和らいでいくような感覚」、そんな感じでした。

その日以来、すいさんと介護者との関係性は、非常に

穏やかで、信頼に満ちた関係であったことは言うまでもありません。このことがあってから、実によくすいさんは笑って下さいました。それは、今までと違った心からの、そしてすいさんらしい、自然な笑顔でした。

さて、ある時期から、すいさんの足はまるで象の足のよう浮腫んで、パンパンに張り、その両足からは、浸出液が出るようになりました。すいさんの身体は、徐々に衰弱し始めていたのです。私は、その浮腫んだ足にオイルを塗って、少しでも楽になるようにと、下から上へと揉んでいました。その時、すいさんは、こうも言いました。「もったいない…よ」と。その言葉に、彼女の過去に、何があったのか、いえ、何が無かったのか、容易に想像することが出来たのです。おそらく、すいさんは人からこうして貰ったことが、無かったのです。人の温かい手に触れて、癒してもらうことなど無かったのです。その時のすいさんの顔は、申し訳ないという顔と同時に、満ち足りた非常に穏やかな顔だったことを今でもはっきりと覚えています。

しかし、その穏やかな関係はそう長くは続きませんでした。この誕生会から、間もなくのこと、自宅で体調が急変したすいさんは、突如、入院してしまいます。

聞きつけて、お見舞いに行くと、既にすいさんはICU（集中治療室）にいて、窓際のベッドの上で、酸素マスクをつけられ、点滴の管が細くなった血管に刺さっていました。「すいさん、来ましたよ。」「すいさん、どうですか？」と、声を掛けると、白く濁ったような目をうつすらと開き、誰だか分かったのか、やっとの想いで、その細くなった腕を伸ばしてきました。急いでその手を握り、すいさんを覗き込むと、聴こえるか聴こえないくらいの、小さな、小さな声で「デイサービスに帰りたい。」「デイサービスで、死にたい。」と言ったのです。その時私は、その言葉に、「早く良くなって帰ろうね」と言うのが精一杯でした。いえ！それしか言えなかったのです。そして、それが、すいさんとの最後でした。

その後ずっと、ずっと、私は、「深い後悔の念」を引きずったままでいました。それは、すいさんを、また「一人、孤独の中に置き去りにしてしまった」という「後悔の念」と「願いを叶えてあげられなかった」「無念」です。天涯孤独と言った、すいさんは、他人である私たちの傍で、「最期の時を迎えたい」、と言ったのです。他人である私たちの傍に帰り、「見守られて、死にたい」、と言ったのです。それなのに、無力な私は、すいさんを二度も！！「一人、孤独の中に置き去りにしてしまった」のです。

さて、私は、この介護の仕事を通じて、沢山のお年寄りと接してきましたが、すいさんのようなお年寄りだけが、特別ではありません。もっともっと孤独の中に身を置くお年寄りを、また、恵まれない環境の中で苦しみな

がら最期の時を迎えるお年寄りを、実に沢山見てきました。独居（一人暮らし）のお年寄りの「孤独死」も、何度か見てきました。最期の時を自ら早めてしまった、お年寄りの「自殺」も見てきました。

- ・人は何のために生まれて来たのだろうか。
- ・この方の人生は、果たして、本当に幸せだったのだろうか。
- ・その人にも、若く溢れんばかりの「輝くような勢い」のあった時代もあったはずだろう。
- ・今まで歩んできたその人生の最期を、どうして孤独の中で亡くなっていかなければならないのだろうか。
- ・他人の私たちに、支えて貰いながら生きる、その瞬間、瞬間は、一体、どんな気持ちであったのだろうか。
- ・その方の長い人生の「最終章」だけを看る、私たちの仕事に、一体何の意味があるのだろうか。
- ・そのお年寄りの「人生の縮図」みたいなものを、安易に覗いてしまったような、そんな罪悪感にも似た気持ちは、どこから来るのだろうか。
- ・他人の人生のほんの一時に関わり、そして、別れる。それなのに、こんなに大きな喪失感を感じてしまうのは、なぜなのだろう。
- ・自分は、その人生の「最期の時」に、何を想い、どんな感覚をもつのだろうか。
- ・自分もやがて、こうした介護を受ける側になった時、何を思うのだろうか。

これらのことは、すいさんのことがあってから…自問自答するように、いつも、いつも、頭の中にありました。私はこの仕事を、一体、何のために、誰のために…何のために、誰のために…と、ずっと、考え続けていました。しかし、その考え続けたことが、やがて、自分の行くべき道、「目標」とも言えるものに変わっていったのです。そして、その「目標」即ち「志」と言えるものが、やがては、この介護の仕事に対する「原動力」となっていったのです。

こうして、その人の「人生の終末期」に、「少しでも心の平安を感じ、人としての尊厳を保つことの出来る介護」「将来、自分がされたいと思う介護」を目指していきたい、という「強い目標」＝「志」ができました。「目標」できると、その目標を達成するためには、具体的に、何をしなければいけないのか、何が必要なのかを、考えるようになります。そして、それは、すいさんのように、その人が望むのなら、最期まで看ることの出来る施設を創ろう。「少数で、生活を中心とした、その人の終末期までを支える介護施設」を創ろうという、具体性を持ったものに変わってきました。では、それを実現するためには、当然、実現するための「スキル」が必要となってきます。しかし、「志」があれば、「強い志」さえあれば、その「スキル」は、後からちゃんと付いてくるものなの

です。そして、これは、すいさんとお別れの後、5年後に実現することとなります。

自分が、介護の世界に夢中になっていったのは、今でも、あの時に、すいさんが与えてくれた「試練」、そして残された「課題」があったからだと思っています。こうして、私たちは、仕事を通して、「自分を越えた何か」が突き動かしていると感じる時を経験することがあり、また、「働きが喜びを与えてくれる」と素直に理解できるようになるのです。人ですから、時々「もう懲りた!」という場面にぶつかります。いつもいつも上手くいくとは限りません。いえ、寧ろ上手くいかないことの方が多いのではないのでしょうか。しかし、一生懸命仕事に打ち込んだ時に感じることは、「もう懲りた」ではなく「忘己利他」の精神を経て感じる充実感です。そして、そこで、私たちは、さらに自らの「人間形成」と「成長の過程」を体現していくのです。

本来、人は何のために仕事をするのか？生きることの目的は何なのか？それは、人は「幸福（しあわせ）」になるために生きているということです。全ては、自分（人）の「幸福」のために働いているのです。そして、その「幸福」ということに意味を持たせるのは「教育」です。この「幸福」という言葉は、外来語です。「幸福」の「幸」、これは「幸せ」と言います。この「幸せ」という言葉も、本来は「仕合せ」「支合せ」という言葉から来ました。「仕合せ」…仕え合う 「支合せ」…支え合う これが人としての本来の姿です。人は一人では生きられない。だから、仕え合い、支え合うのが人間の姿です。そして、この仕え合い、支え合うことのできる時が、「幸せ」を感じる時です。だから、人は、幸せになるために生きているんです。

そのことの実現のために、ほんの一部をお手伝いさせて頂いてることが、私たちの「介護」という「福祉」の仕事です。それならば、「福祉」とは何でしょうか。「福祉」という言葉も、また明治時代の外来語ですが、「福」のしめすへん「示」これは神前にお供えを置く台。そして右の「一口田」これはお供え物。このお供え物を、神前から下げて、みんなに分ち合う、という意味です。また「福祉」の「祉」「祉」の右の「止」これは言うまでもなく、そこに止まる（とどまる）ということですから、「福祉」とは、「満足すべき生活環境」「幸せな生活環境」、そのものの意味です。ですから、私たちは、「みんなに分ち合い、支え合い、幸せな環境をつくるために働いている」のです。つまり、「人は幸福（しあわせ）になるために働いている」のです。

ご清聴ありがとうございました。

——ニコニコ——

石井哲也君

末娘が成人式をおえました。まだスネはかじられていますが、少し肩に荷がおりました。

マルチプル・ポールハリスフェロー表彰

狩野 勉 会員（4回目）



ロータリーの行動規範

ロータリアンとして、私は以下のように行動する。

1. すべての行動と活動において、高潔性という中核的価値観の模範を示すこと。
2. 職業の経験と才能をロータリーでの奉仕に生かすこと。
3. 高い倫理基準を奨励し、助長しながら、個人的活動および事業と専門職における活動のすべてを倫理的に行うこと。
4. 他者との取引のすべてにおいて公正に努め、同じ人間としての尊重の念をもって接すること。
5. 社会に役立つすべての仕事に対する認識と敬意の念を推進すること。
6. 若い人々に機会を開き、他者の特別なニーズに応え、地域社会の生活の質を高めるために、自らの職業的才能を捧げること。
7. ロータリーおよびロータリアンから託される信頼を大切に、ロータリーやロータリアンの評判を落としたり、不利になるようなことはしないこと。

銚子・銚子東RC合同例会ご案内

日 時：平成 26 年 1 月 29 日（水）
 受 付 18：00
 点 鐘 18：30
 懇親会 20：00

場 所：太陽の里

卓 話：「随所に主となる」

第 2800 地区 PDG 藤川 亨胤 様（鶴岡 RC）

送迎バス：銚子市役所 17：45 出発

銚子市体育館 18：05

前 回 の 例 会 (1/14) 報 告

点 鐘 宮内 博 会長

出席報告

会員総数	42 名	出席規定除外数	9 名
出席者	42 名	出席率	68.42 %
12月24日		確定出席率	100 %

来訪ロータリアン

佐藤直子君 (銚子RC)

欠席者 12名

メイクアップ なし

スモールコインBOX

小 計 ￥ 2,156-

累 計 ￥ 58,901-

ニコニコBOX

小 計 ￥ 20,000-

累 計 ￥305,700-

銚子東ロータリー・クラブ

銚子市三軒町19番地の4 銚子商工会館内 TEL0479(23)0750 FAX0479(25)8789
 メール c-higashirc@tcs-net.ne.jp URL <http://www.tcs-net.ne.jp/~rc>

例会日時及会場 毎週火曜日 12時30分点鐘 銚子商工会館5階大会議室
 会長 宮内 博 副会長 石井 哲也 幹事 釜谷 藤男
 クラブ広報・会報委員会 宮内 勝利・佐野 幸雄・宮内 宗一・杉浦 武
 表紙題字 網中喜一郎初代会長

R. I 第2790地区

ほととぎす 銚子は国の とっばずれ

古 帳 庵

江戸小網町の豪商鈴木金兵衛夫婦（古帳庵 古帳女）が銚子に遊んだときに

詠んだもので、この碑は圓福（円福）寺に現存する。